

市民文化財研究員活動報告書 21

2017. 3

仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館

は じ め に

地底の森ミュージアムが開館して20年が過ぎ、これまで83万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図るとともに、市民の生涯学習を支援するため、各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、19期145名が市民文化財研究員の研修を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第20期市民文化財研究員6名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、その活動成果を報告するために本書を作成しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

平成29年3月

仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光
仙台市富沢遺跡保存館
館長 金森 安孝

目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

日本列島の旧石器時代	鈴木 堯	8
土偶に魅せられて	菅澤 広信	14
食べることは生きること	大槻 正俊	20
縄文土器が語りかけてくれたコト	佐藤 則子	26
三神峯遺跡の表面採集	中野 直子	32
大野田周辺の遺跡と今	穴戸富美子	38

例 言

1. 本書は平成28年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、その他は仙台市富沢遺跡保存館である。全体の編集は館員平塚幸人が行った。
3. 報告書作成に際して、主に参考とした文献や資料は各活動報告に参考文献として記載しているが、紙数の関係で全てを記載していないものもある。

I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらうたのしい地底の森教室、石器を使ってみようコーナー、参加者を公募する旧石器体験教室、親子体験教室、考古学講座などを行っている。こうした活動の参加者には、新たな興味をもったり、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う市民がいて、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。施設面では館内に市民活動のための専用スペースはなく、また、研修室の利用や利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、平成27年度まで19期にわたって合計145名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～20』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をホームページで公開している。

平成28年度は、第20期市民文化財研究員として6名が活動を行い、それぞれのテーマに沿って自主的に活動を行ってきた。

Ⅱ．市民文化財研究員とその活動

1．目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

2．活動期間

年度の1年間とする。定員は15名（今期は平成28年4月13日～平成29年3月22日）

3．支援の内容

（1）研究場所の提供

- ・地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

（2）研究の補助および研究方法についての相談受付

- ・学芸員による考古学についての講義。
- ・学芸員による個人ごとの対応。

（3）収蔵図書の利用

- ・室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

（4）市民文化財研究員証の発行

- ・登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

4．活動内容

（1）毎週水曜日午前2時間の学習（地底の森ミュージアム1階研修室）

登録日（館員1名が在室）

（2）年1～2回開催する見学会での学習（遺跡や博物館施設の見学）

（3）活動報告書の刊行

（4）その他

- ・館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。
- ・登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。
- ・研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

Ⅲ．活動支援概要

1．概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

平成28年4月～6月	登録日学習の開催日	
7月～9月	自主学習期間	
10月～12月	登録日学習の開催日	活動報告執筆のための相談
平成29年1月～3月	登録日学習の開催日	活動報告執筆のための相談

2．第20期市民文化財研究員修了者（五十音順）

大槻 正俊 佐藤 則子 穴戸富美子 菅澤 広信 鈴木 堯 中野 直子

3．週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を水曜日の午前に設け、活動を行った。

4．登録日と出席者数

平成28年4月13日	オリエンテーション【6名】	
4月20日	講義【6名】	5月11日 講義【4名】
5月18日	講義【6名】	5月25日 講義【6名】
6月 1日	講義【6名】	6月 8日 講義【6名】
6月15日	講義【6名】	6月22日 講義【5名】
7月27日	講義【6名】	10月12日 講義【6名】
10月19日	館外見学【6名】	10月26日 館外見学【5名】
11月 9日	講義【6名】	11月16日 講義【6名】
11月13日	研修旅行（ボランティア合同）【4名】	
11月23日	講義【5名】	12月 7日 講義【6名】
12月14日	講義【6名】	12月21日 講義【6名】
平成29年1月11日	報告準備【5名】	1月18日 報告準備【6名】
1月25日	報告準備【6名】	2月 1日 報告準備【6名】
2月 8日	報告準備【6名】	2月15日 報告準備【6名】
2月22日	報告準備【6名】	3月 1日 報告準備【6名】
3月 8日	報告準備【6名】	3月15日 報告提出【5名】

3月22日 研修旅行【6名】

5. 館外活動

10月19日は富沢遺跡第149次調査の現場見学、10月26日は富沢遺跡第149次調査・六反田遺跡の現場見学を行った。11月13日に「山王岡遺跡（栗原市）」への研修旅行を地底の森ミュージアムおよび縄文の森広場のボランティアと合同で開催した。3月22日には、仙台市縄文の森広場、名取市の雷神山古墳・飯野坂古墳群・十三塚遺跡を館外活動として見学した。

IV. 活動報告

考古学あるいは遺跡をもとにして、研究員がそれぞれの興味関心をもとにテーマを設定し、調査や実験を行った活動成果をまとめた。第20期市民文化財研究員は、平成28年2・3月の募集で、実際の活動は4月からであった。

それぞれの活動をみると、活動当初から具体的なレポート作成に向けた動きをする方、当館での学習活動や他館を見学するなかで興味関心を持ったことを調べる方など、各自の関心をもとにして積極的な活動の傾向がみられた。それぞれが取り組んだテーマについては、遺跡や博物館の見学、関係施設への取材、文献やインターネットなどからの情報収集など、各自が様々な調査を行い、課題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしてい、今回は6名の活動を報告することにした。



10月19日 富沢遺跡発掘現場の見学



3月22日 十三塚遺跡（公園）の見学

日本列島の旧石器時代

鈴木 堯

1. はじめに

市民文化財研究員としてこの1年、考古学資料をとおして日本古代文化を学んできた。学びの場となった[地底の森ミュージアム]富沢遺跡は旧石器人類の生活跡と森林跡が生々しい姿で発掘されて旧石器時代の研究に重要な影響と貢献をもたらした。

この報告書を作成するにあたって、テーマとして富沢遺跡の時代背景をもっと知りたいとの動機で、日本列島最古の人類文化を選んだ。日本の場合火山ローム層の酸性土壌に覆われているために、木器や骨角器などの遺物が発掘されるのは極めて稀であり、石器と遺跡を中心に日本列島の旧石器時代の人類の生活・自然環境に着目して知りえたことを整理した。これは勉学活動記録であり、この勉学活動記録を私の旧石器時代研究のガイドブックにしたい。

2. 成果

日本列島の旧石器時代区分

日本列島における旧石器時代は、前期・後期に区分する見方が多い。アフリカに生まれた現生人類(ホモ・サピエンス)が「偉大な旅」をへて、日本列島にたどり着いたとされる約4万年前から土器の出現(縄文時代)までの約1.5万年前を後期旧石器時代。4万年前以前を前期旧石器時代とする。1949年相沢忠洋による「岩宿の発見」以来、今日までに少なくとも1万ヶ所を超える旧石器時代遺跡が確認されている。地域によって分布の疎密こそあれ、北海道から九州、沖縄に至るまでほぼ全国にこの時代の遺跡がみられる。旧石器人が列島各地に拡散し、その自然環境に適応して生き抜いた確実な証拠といえる(堤

2001、阿子島 2015)。

後期旧石器時代の環境

旧石器時代に該当する第四紀更新世は氷河時代ともよばれ、氷期と間氷期が交互に繰り返されるという、厳しい気候変化に見舞われた時代であった。後期旧石器時代はその最終氷期にあたり、酸素同位体比によるステージ区分でいうとステージ3および2にあたる。また2.5万年を前後する頃には、最終氷期最寒冷期とよばれる最も寒冷な時期があった。最寒冷期には海面は100m近く下がっていた。そのため日本列島は大陸と陸続きか、それに近い環境にあり、動物や植物も現代とは違っていた。この頃には人類はシベリアまで活動範囲を広げており、多くの旧石器時代の遺跡が発見されている。

寒冷な後期旧石器時代の植生と動物相

後期旧石器時代の人類にとって狩猟・採集が主要な生業であり、気候変動に起因する動植物の変化に大きな影響を受けていた。富沢遺跡から約2万年前の樹根や幹、枝などが生々しい姿で発見された。それらはトウヒ属を主にモミ属、グイマツなどの針葉樹林で構成されていた。広葉樹はわずかにハンノキ属が混ざる程度である。こうした植生は今の仙台よりも年平均気温が7～8度低い寒冷な環境を物語っている。花粉分析から、コケモモやクロマメノキなどベリー類もあったと考えられている。

最終氷期の日本列島の動物相は二つの要素から成り立つと考えられている。一つはナウマンゾウ、ヤベオオツノジカ、ニホンムカシジカ、ツキノワグマなど東シナ海に陸橋が形

成された約40万年前頃に成立した動物群である。もう一つは、マンモス動物群でマンモス・バイソンやヘラジカがみられ、シベリアからサハリン経由で北海道へ移入、本州にもヘラジカなどは南下した。

旧石器群の変遷と環境

旧石器時代の人類文化は、当時の人を取り巻く環境に適応するための手段が反映されたものと考えられる。したがって、石器群の変遷の背景には環境の変化とそれに適応しようとした人間の営みが想定される。後期旧石器時代の人類は、移動する狩猟対象動物の群れを追うために居住地を転々と移動させる遊動と呼ばれる居住形態であったとされている。遊動は当時の生業と深く関わっており、その範囲やルート、規則性、同一地点への回帰の度合いなどは、当時の生活の具体的で貴重な情報である。遊動形態を推定する上で、遺跡から得られる最も重要な情報は石器石材とその産地である。産地をもとに遊動範囲とルートを推定することが期待されるのである（沢田 2015）。

以下、堤隆氏の編年案（堤 2009）をもとに石器と暮らしの変遷を概観してみたい。

第1期（約4万年前～3万2千年前頃）

—台形様石器群—

台形様石器とナイフ、局部磨製石斧を含む台形様石器群がみられ、環状ブロック群と呼ばれる大規模に石器が分布する遺跡がみついている。この石器群は、石器の形態・組成・加工技術等にもみる石器群の地域色が明瞭でなく、むしろ列島全域において等しい内容を見せるのが大きな特色である。石器の機能は、台形様石器はヤリの先端につけられた狩猟用刺突具とみられ、木などの加工具としても使われたようである。局部磨製石斧は木材の伐採とナウマンゾウなど大型動物の解体道具として利用された可能性が高いと考えられている。

石器製作に関しては、ほとんどの遺跡で剥片の剥離を盛んに行っている。原石、もしくは石核を携帯していたと考えられる。後期旧石器時代前半期の石器製作は必要に応じて随時行われたと考えられる。このことは当時の遊動生活では狩猟活動や石材採取などの見通しや計画性があまり高くなかったか、あるいは道具が一つの形でいろいろな用途に使用できる万能石器ではないため、その都度製作する必要があったなどの理由が考えられる（沢田 2015）。この時期を特徴付ける環状ブロック群は、遊動生活の中でいくつもの世帯が集合し、環状のキャンプを設営した結果残されたものとみられている。環状集落ともよばれ、湿原や豊富な湧水地を求めて大型動物が集まるような場に近い位置とみなされ、大型動物を捕獲、解体し、祭りをを行い、分配する場であったのであろう（白石 2002）。

長野県日向林遺跡から台形様石器と一緒に搔器も出土している。搔器は皮なめしに利用されたことは確実で、当時の皮革製品（衣類・寝具・テント・革袋等）の存在を推定させる道具である。鹿児島県種子島立切遺跡では、植物加工具とみられる石器類（石皿、磨石）とともに多数の礫群が発見されている。ハシバミなど堅果類を食料として利用し、また礫を用いて石蒸し焼き調理がなされていたことも想定される。この時期の遺跡群では近傍にあるガラス質安山岩やチャートなどの利用が目立ち、遠隔地黒曜石がごくわずかにみられる。したがって遊動範囲は比較的狭かったと想定される（堤 2001）。しかし神津島（東京）産の黒曜石でできた石器が山梨県横針前久保遺跡などから出土しており、海を越えての広範囲な活動がみられる。渡海技術をすでに持っていたことが窺える。石器の使い手兼作り手集団は、遠隔地石材原産地・狩場間往復を繰り返し、遊動範囲は広がったとも想定される（安蒜 2001）。

表 旧石器時代の石器の変遷と遊動環境

	時期	気候	植生	石器群	地域性	石器製作・石器消費	遊動と生業
後期旧石器時代前半	4万年前 第Ⅰ期 3.2万年前	寒冷化 (やや温暖)	太平洋側は疎林と湿原 日本海側は針広混交林	台形様石器群 局部磨製石器を伴う	列島全域	各遺跡で剥片剥離 石刃は集中的に製作して形態 遠隔地石材多用	環状ブロック群 狩猟の対象はナウマンゾウなど大型動物か 遊動範囲は広い 皮革製品の存在 堅果類の調理 北海道から流入した大型動物(ヘラジカ、野牛など)が主な対象か AT火山灰降下
	第Ⅱ期 2.8万年前				日本列島の東西において剥片剥離技術の縦と横に二極化 地域色の萌芽		
後期旧石器時代後半	第Ⅲ期	最寒冷期	亜寒帯針葉林 日本海側南部は針広混交林	ナイフ形石器群	地域色強まる 北海道:広郷型 東北:東山型 杉久保型 中部・関東:切出形 近畿・中国・四国は国府型 九州では剥片尖頭器	石材獲得時に集中的な石刃製作 彫刻刀を刃部再生しながら長期間携帯	狩猟対象は中小型動物 漁撈のめばえ 一定の人口増し 遊動範囲は狭い
	第Ⅳ期 2万年前					近在地石材専用	
	第Ⅴ期 1.8万年前	寒冷	亜寒帯針葉林 日本海側南部は針広混交林 一時的な広葉樹増加?	尖頭器石器群	北海道に細石刃 九州でも細石刃 関東・中部で尖頭石器群が発展	遠隔地石材、近在地石材併用 石器製作者集団の出現?	堅牢な住居・半定住化へ 漁撈を加えた高度の狩猟採集 小さなムラ・自立したイエ
	第Ⅵ期 1.5万年前			細石刃石器群	ナイフ形石器群が消滅 北海道東北日本の湧別技法による細石刃石器群 西南では矢出川技法 細石刃石器群が展開		

この表は(沢田2015)をもとに作成した

第Ⅱ期(約3万2千年～2万8千年前)

—剥片剥離技術開発—

ナイフ形石器と呼ばれる狩猟用刺突具が確立する時期。石核整形・剥片剥離・調整加工の工程を持ち、画一化した素材の生産技術によって、ナイフ形石器や搔器・彫刻刀型石器などが作られる。東日本には縦長剥片剥離技術が、西日本には横長剥片剥離技術が成立する。機能では、Ⅰ期の石器群では槍先として使用されることが少なかったナイフが槍先の主体を占め、結果的にⅠ期に比べて、用途に応じた石器形態の違いが明確になった。

静岡県初音ヶ原遺跡から、陥し穴とみられる土坑が60基発掘された。膨大な労働力をつぎ込んで掘る陥し穴なので、「その効果を

考えた場合、群れをなして丘陵尾根筋を移動するシカ猟が最適であるとし、待機猟であったと推定する。だとすれば、遊動集団は陥し穴待機猟を組み込んだ独自の居住生業システムを有していたものと思われる」(堤2001)。

相模野台地では、第Ⅱ期前半はⅠ期と同じく遠隔地産黒曜石利用が僅かにみられるものの近在地産の石材利用が目立つ。後半になると遠隔地産黒曜石が多用され、近在地産石材は補てん程度の役割となる。この期の各遺跡では、第Ⅰ期の石器と素材用剥片に加えて原石が一定量出土している。

この期の遊動形態は狩場と遠隔地石器石材原産地との間を往復しながら、狩場内周回も

行われ、「石器を使用する作業の量やスケジュールに対する正確な見通しと、その見通しをもたらした計画性の高い生業を背景にしていたと考えられる。石材確保の遠隔地の観点から遊動範囲の広さが想定される」（沢田 2015）。なかには列島を縦貫する方向のきわめて広域の遊動もあった可能性もある。この時期の広範囲を遊動する居住形態は移動性の高い大型動物を追った結果とも考えたい。

第Ⅲ期・第Ⅳ期（約2万8千年～2万年前） —ナイフ形石器を主体とした石器群—

第Ⅲ期は、ナイフ形石器として包括される狩猟用刺突具の地域色強まる。北海道では広郷型、東北では東山型や杉久保型、中部・関東では切出型（茂呂型）、近畿・中国・四国では瀬戸内技法による国府型がみられ、九州では三稜尖頭器や剥片尖頭器が発達する。第Ⅳ期になると、北海道では本州より数千年先行し2万5千年前頃から細石刃石器群が成立、中部・関東では発達した石刃技法によるナイフ形石器群が展開する。九州では台形石器が発達する。

石器に違いは見られるが、両期は、石材利用に当たって遠隔地原産地の利用が影をひそめ、相模野では近在地の天城箱根系の黒曜石が多く出土し、切出形ナイフ形石器や搔器に多用される。また、グリーンタフや黒色安山岩など近傍の石材も頻繁に用いられている。石器製作に当たっては、原石と石刃剥離が同一遺跡で認められることが多く、石核が搬入された遺跡は少ない。したがって、石器や石刃を携帯する遊動と考えられている（沢田 2015）。この時期には最終氷期最寒冷期も含まれており、大形動物の絶滅があり、中形、小形動物が主な狩猟対象へと移っていく段階と考えられる。

日本列島各地で遺跡が確認され、一定の人口増があったことが想定できる。遺跡は、台地を侵食して流れる中小河川が形成した、張

りだし状の台地縁辺部にあり、しかも流域に沿って連綿と続くことが大きな特徴で、流域に分散する居住パターンである。流域遺跡群とも呼ばれている。集合して居住し環状のムラ（大集団）をかまえる様式から、分散して居住し川辺のムラ（小集団）をかまえる様式へと、人々はその生活の枠組みを改めたとする（安蒜 2001）。遊動は狩場内の狭い地域の周回移動に終始し、道具類も近在の石材を利用していることから、遊動範囲は狭かったと考えられる。結果流域内での遊動が密になり、回帰的な居住地が残されたのではないか。河川は水場の確保とともに漁労活動が推定され、集落の下方は河川交通などの舟着き場であった可能性がある（白石 2002）。

第Ⅴ期（約2万年前～1万8千年前頃） —尖頭器石器群—

北海道には細石刃石器群が広がり、九州でも細石刃石器群が登場する。中部・関東地方では、細石刃石器群が登場するまでの間、尖頭器石器群が各地でみられる。

第Ⅴ期になると、関東地方の遺跡では遠隔地産石材がまた用いられ、近在地石材との併用がみられる。この期のムラは川辺に構えており、狩場内を周回するような遊動を続けている。彼らは石器を主に使用する暮らし、石器の使い手となった狩人集団と考えられている。その一方、石器を主に製作する集団が遠隔の石器石材原産地から狩場へ移動するという暮らしもあるとされている。その証拠として、石器製作者集団が定期的に往来した石器石材原産地と狩場の双方には、何回も利用できるような堅牢な造りのイエが建てられた。鷹山第Ⅰ遺跡S地点と田名向原遺跡でみつかった住居状遺構が、このような機能をもったイエだったと考えられている（安蒜 2001）。

第Ⅵ期（約1万8千年前～約1万5千年前頃） —細石刃主体の石器群—

列島全域に細石刃石器群が展開する。この時期、北海道から東北日本を中心としては湧別技法に代表される北方系の削片系細石刃石器群が展開し、これに荒屋型彫刻刀形石器がセットとなる。一方、矢出川技法による細石刃石器群が西南日本に広がりを見せ、列島の南北を二分するような大きな地域色をみせる。細石刃石器群は列島の南北において大陸との系統関係をもって成立しているとみられ、後期旧石器時代終末期のヒトや文化のダイナミックな流れが読み取れる（堤 2001）。

第Ⅵ期も、Ⅲ・Ⅳ期以降と同じように川辺にムラを構え、狩場内を周回する遊動スタイルは変わっていない。「人びとは堅穴住居をつくらず、簡易的なテントのような住居に住んでいたが、荒谷遺跡では堅穴住居状遺構や多くの土坑が検出された。（中略）オニグルミなどの堅果類の採取」活動もみられる（鹿又 2015）。

東北日本では、細石刃石器群の狩猟道具が高度に発達して狩猟の精度も高まり、そのうえ漁労や堅果類の利用も加わって、食料確保は安定していったことが想定される。遊動生活から半定住化へ、そして縄文時代の定住化へと展開していったことが考えられる。

3. さいごに

およそ4万年前から1万5千年前までの2万5千年間続いた日本最古の時代を厳しい環境に適応して生き抜いた、日本列島の後期旧石器時代のひとびと。その遊動生活、生活様式、文化の一端を窺い知ることができた。「その生活様式は、最寒冷期を生きた北方ユーラシアの人間集団と生存戦略の多くを共有していたものであった。広域的な居住地の移動、季節的な生業活動、移動生活のなかでの装備の維持と管理、食料資源の状況の把握、石器の良質な材料の確保、寒冷な気候下での身体保温、広大な社会的ネットワークなど、イギリスの先史考古学者ギャンブルが後期

旧石器時代の革命と称したような、新人が発展させた生存戦略のセットは、後期旧石器時代に生きた人びとも保持していたものであった」（阿子島 2015）。

私たちの祖先ともいえる後期旧石器時代のひとびとが、精神文化をも備えた石器文化をもち、社会を構築したことに誇りを持つと同時に最大級の賛辞をおくりたい。今後も旧石器時代の勉強を継続し、深めていきたい。

引用・参考文献

- 阿子島香（2015）「氷河時代の人類生活を探る」『北の原始時代』吉川弘文館
- 安藤政男（2011）「旧石器時代編」『日本列島石器時代史への挑戦』新日本出版社
- 稲田孝司編（1993）『古代史復元1 旧石器人の生活と集団』講談社
- 太田昭夫編（1996）『地底の森ミュージアム常設展示案内』仙台市富沢遺跡保存館
- 岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻誠一郎・馬場悠夫（1998）『シンポジウム日本の考古学 旧石器時代の考古学』学生社
- 鹿又喜隆（2015）「地球温暖化と縄文的適応へ」『北の原始時代』吉川弘文館
- 国立科学博物館編（2001）『日本人はるかな旅』NHKプロモーション
- 佐藤宏之（2000）『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 沢田敦（2015）「旧石器人の装備と変動」『北の原始時代』吉川弘文館
- 白石浩之（2015）『旧石器時代の社会と文化』山川出版社
- 仙台市富沢遺跡保存館編（2012）『発掘富沢—30年のあゆみ』展示図録堤隆（2001）『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社
- 堤隆（2009）『旧石器時代ガイドブック』新泉社

土偶に魅せられて

菅澤 広信

1. はじめに

縁あって富沢遺跡の片隅に、終の住処と心得し拙宅を構え早 30 年、この道一筋に歩んだ仕事も定年退職し、無聊を託つ日々を過ごしている時に、ゆくりなく市の広報誌で、市民文化財研究員募集を知り、来し方行く末を見据え、この地において、古の人々の生き方に想いを馳せてみるのも一考と、自分の無学さも忘れ、これに飛びつき、以後地底の森ミュージアム（仙台市富沢遺跡保存館）において館長以下館学芸員から、考古学概説などについて、様々な蒞蓄を交えながらの、人を逸らさない講義を一年間にわたり拝聴し、折々には遺跡見学や縄文土器作り、編布づくりまで体験してきた。

その結果、太古の営みを探ることの奥深さや面白さに気づかされた。中でも仙台市縄文の森広場を見学した際に、それまでは写真や資料での知識しかなかった「土偶」と初めて対面した瞬間、その表情や姿形に、そこはかとなく安らぎや懐かしさを感じ、思わず魅せられてしまい、古の人々にとって「土偶」とは何だったのだろうかとの思いを抱き、自分なりの視点で「土偶」について掘り下げてみることにした。

2. 活動内容

まずは、縄文の森広場において実物を目にするまでは、見たことがなかった「土偶」を数多く実見することにして、東京国立博物館、国立科学博物館、秋田県立博物館、山形県立博物館、更には青森県三内丸山遺跡、秋田県地蔵田遺跡、宮城県里浜貝塚や大木岡貝塚などを見学し、重要文化財や国宝の指定を受けたものを含め、数多くの「土偶」を矯めつ眺

めつ観察した。

その中でも就中、心に刻まれたのは、山形県立博物館に展示されていた「縄文の女神」と呼ばれている「土偶」であった。これは、重要文化財の中でも類まれなるものとして、国宝に指定されたもので、その迫力や造形美はもとより、何よりもその気高さに圧倒され、これを作りだした縄文人の感性や心の豊かさに、いたく感動した。

3. 成果

このように多数の「土偶」を実見した結果、その大きさも形も様々であったことから、何をもって「土偶」と称しているのかとの疑問が湧き、調べた。

「人の形をした小型の土製品。新石器時代から世界各地で作られ、日本では縄文時代早期に出現し、弥生時代のはじめころには消滅する。特に東日本から多く出土しており、乳房やふくらんだ下腹部が表現されることから女性像とされ、生殖・豊穡に関わる母神像とみる説もある。出土する土偶は、殆どが頭・手・胴・足などで意図的に破損されている。」（平凡社編 2000）

「縄文時代の草創期から早期に作られ始めた、土製の人形で草創期のものは、小型で頭部のないものが多く、頭部がついていても目・鼻・口の表現がない。その一方で、いずれの土偶も胸を強調し、腰のくびれとともに、女性的な雰囲気醸し出す造形が多い。縄文前期になると頭部や四肢を表現するものが増え、中期では五体を有する土偶が一般的になり、顔の表情、腕や脚のポーズなど、より一層豊かな表現の可能性を獲得し、多彩な形態の土偶が作られるようになった。」（MIHO・

MUSEUM 編 2012)

などと説明されていることから、我が国においての「土偶」とは、人の形をした小型の土製品であり、縄文時代の初めころに、小さくて粗雑なものが作られはじめ、時間の経過と共に複雑で精巧なものに変遷し、縄文時代の末ころに消滅したものであることが分かった。

この「土偶」は消滅した後、悠久の時を経て1622年、津軽藩が藩内に築城した際に、土器や土偶が出土したことが『永禄日記』に記述されていて、これが「土偶」の登場する国内最古の文献とされている。その後1798年、蝦夷地の探検調査結果が著された『蝦夷島奇観』に、北海道の函館付近で発見されたとする「土偶」の図が掲載され、それ以降、これまでに国内各地において多数の「土偶」が出土し続けている。その大きさや形、作り方などから共通要素を抽出して、これをグループ化した上でグループ間の異同を調べ、何故そのようになったのかについて考えるといった、考古学の基本的な方法や見方に基づき、様々な角度から研究されている（三上 2013）。

次に「土偶」は、東日本からの出土が多いと記述されている文献もあったことから、東日本という広範囲な括りではなく、現代の行政区に照らして、都道府県毎の出土状況について調べたところ、概数ではあるが青森県 3,100 点、岩手県 2,700 点、新潟県 2,000 点、山梨県 1,700 点、千葉県 1,300 点、長野県 1,200 点、秋田県 900 点、北海道 500 点と、東日本の中でも北東北地方の遺跡から数多く出土していることが判明した。なお、遺跡からの出土数としては、三内丸山遺跡から約 2,000 点も出土しており、ひとつの遺跡としては、現在のところ全国最多であり、遺跡の調査が進めば、更に増えることは確実であろう（MIHO MUSEUM 編 2013）

以上から、約 1 万年間続いた縄文時代の

遺跡からは、数多くの「土偶」が出土しており、縄文人の生活にとって「土偶」との関係は密接であったことが推測できるものの、縄文人がどのような気持ちで「土偶」を作り、どのように用いたのかが分かれば、その関係についても、より具体的に説明できるものと考えた。

調べてみると、(1) 頭部や胴部、腕や脚部などに破壊された状態で出土しているものが多い。(2) 完形土偶が発掘されることは、極めて稀なことである。(3) 遺跡内の特定箇所から纏まって出土するより、分散された状態で出土している。(4) ほとんどの土偶は、女性をモチーフにしている。(5) 縄文人の生活に、深い関わりを持っていたこと。などについては考古学者間では、概ね見解が一致しているものの、肝心の「土偶」を作った目的となると呪物説、安産護符説、玩具説、神像説、装飾品説、護符説などの諸説が発表され、これら一つ一つの説は、「土偶」の一面を言い当てているとみられるが、確たる根拠と言えるものはなく、現時点において「土偶」を作った目的、用途は確定されていないといえる（小野 1984）。

しかし、このような現状も「土偶」を研究したり、求知心を掻き立てられる一因になっているものと忖度できる。

○土偶作り体験

以上の通り、「土偶」の定義、出土した地域や数、作りだした目的、用途などについて調べたものの、永遠のテーマとなっていることが多々あることが分かり、ならば実際に作ってみれば、何かが分かるかもしれないとの創意にたち、造形美に優れ、現代アートとしても十分に通用する「縄文の女神」を模倣したものを作ってみることとした。

研究員活動において、縄文土器を造形して文様をつけ、自然乾燥後に敷地内で素焼して、縄文土器を完成させた経験を生かして制作を

試みることにし、最初に使用する粘土を選択することにした。

「土偶」を作る粘土に特別な拘りはなかったが、造形後の素焼きは、諸法令の制限により屋外では不可能であることから、自宅内で素焼きできる粘土を探した結果、釉薬を使わない素焼きであれば、オーブントースターを使用して素焼きができる粘土の存在を知り、これを手に入れた。自宅のオーブントースターの容量を基準にして、作りだす「土偶」の大きさを、実物の1/3に縮小することにして、着手した。

構想段階においては、私がこれまでに趣味で製作した、ペーパーナイフ、靴ベラ、オブジェ等のように、完成品をイメージしてデッサンを重ねてから、作品作りに取り掛かるのではなく模倣する実物を見て、細部を写真撮影した上で、それに基づいて陶芸用粘土を使用して手捻りで作るのだから、なんとかなるだろうと高を括って、作り始めた。土器づくりの技術と現代用具を併用しながら、頭部からはじめ、上半身そして下半身の順に作った。具体的な手順は以下のとおりである。

- ① 最初に、大小のスプーンを使用して頭部を造形し、千枚通しで細部を調整する
- ② 頭部とのバランスを図りながら、大雑把に胸部と腹部を造形する
- ③ 造形を終えた後に、スプーンやフォークを使用して、胸部や腹部の細かな箇所を整える
- ④ 胸部等と頭部とを頸部で接合する
- ⑤ 出来上がった上半身とのバランスを図る
- ⑥ スプーンや直線定規を使用して、臀部や腰部の造形をする
- ⑦ 臀部や腰部を、上半身と接合する
- ⑧ 直線定規を使用して、脚部として長方形の粘土塊を造形する
- ⑨ 脚部の中央にカッターナイフで切り込みを入れ、左右に切り離す
- ⑩ 脚部を接合して全身の形を整える
- ⑪ 千枚通しを使用して、胸部や腰部、脚部の

順に文様をつける

⑫ 自立できるように脚底部の安定性を調整して完成

着手前に、最も難しいであろうと想定していた頭部が、ことのほか容易にできたことから、ならば、国宝土偶と同程度のクオリティーで作りだせるものとほくそ笑みながら、考えすぎて慎重になり、粘土を乾燥させてしまわないように注意しながら、作り上げた。中でも特に難しさを感じた点は、④工程の頸部の強度。⑤工程の、直線と曲線とが混在している、胸周りの造形。⑥工程の、上半身の薄さに比べて、厚みのある臀部や腰部まわりの造形。⑧工程の、スマートでありながら、安定感のある脚部の造形。⑩工程の腰部や脚の付け根あたりの文様付け、など進捗するに従って、次々と難題に直面した。

その中でも、最も難しく、最終的に私の持ち合わせている、感性や技量では到底模倣することができなかったのは、根本的な造形美を損なうことなく、八頭身のトータルバランスを保持させることであり、特に胸部の造形、腹部と臀部のデフォルメ具合、直線と曲線との融合性については、全く太刀打ちすることができず、完成したものは「縄文の女神」の造形とはかけ離れ、「土偶」作りの難しさを痛感した。

と同時に、私のように、単に模倣したのではなく、全ての物を自給自足する生活を営みながら、目的や用途に応じて、そのデザインを考えて「縄文の女神」等の「土偶」を作りだした、古の人々の想像力・表現力・技術力に思わず脱帽した。

煖衣飽食、贅沢三昧に奢れている、私が作りだした「土偶」もどきと、古の人が営んでいた時代の自然・生活環境下において、様々な想いを込めて作りだした国宝土偶と比ぶべくもないが、これが完成品である【写真1】。



写真1

○国宝土偶の紹介

「土偶」作りを体験して感じたことは、「縄文の女神」が、如何に素晴らしいのか理解できたことである。改めて他の国宝土偶についても、その素晴らしさを知りたいとの興味が湧き出し、現時点において国宝に指定されている「土偶」について調べた。その結果、長野県で出土した2点、山形県、青森県、北海道で出土した各1点の計5点が、国宝に指定されていることが判明し、これら5点の「国宝土偶」について調べて集約したことを、国宝に指定された順に紹介する。



写真2

最初に国宝に指定された「土偶」は、1986年（昭和61年）に長野県・棚畑遺跡から出土した通称「縄文のビーナス」【写真2】と呼ばれているもので、今から約4,500年前（縄文中期ころ）のものとされている。高さ27cmで、下方に重心がある安定した

立像で、やわらかな曲線を多用して、膨れたお腹、はっきりとした乳房などが表現されている。切れ長のつり上がった目、尖った鼻に針で刺したような小さな鼻穴やおちょぼ口などの顔を持ち、文様は頭部以外にはなく、そのデザインや表情から、女性の優しさや、ふくよかさが感じられ、妊娠した女性の様子をよく表している。出土した場所は、集落で祭りなどに使う広場の中の、小さな穴の中に横たわるように埋められていたことから、壊されたのではなく、埋め置かれたものと考えられている。

1995年国宝に指定され、長野県茅野市・尖石縄文考古館にて保管されている（茅野市尖石縄文考古館ホームページ）。



写真3

続いて国宝に指定された土偶は、1975年（昭和50年）に北海道・著保内野遺跡から出土した中空土偶【写真3】で、今から約3,500年前（縄文後期後半ころ）のものとされており、北海道内で唯一の国宝である。この土偶には、国宝土偶で唯一、発見場所の地名である南茅部地区の頭文字である「茅（カヤ）」と中空土偶の「空（クウ）」を合わせて「茅空（カックウ）」という愛称がつけられ、親しまれている。

高さ41.5cmで、作りが精巧で写実的であり、表面がよく研磨された均整の取れている。特に、下半身の文様は緻密に印象されており、土偶の中は空洞になっており（中空）、腹と顎には黒色、両脚の内側には赤色の顔料が塗られており、中空土偶としては国内最大級のものである。なお、この土偶は、農家の女性が、ジャガイモ畑で芋掘り中に見つけたものであり、発見場所を調査した結果、墓と見ら

れる細長い穴が見つかり、埋葬品の可能性が高く、当時の祭祀や呪術的な生活文化を知る上で欠かせない資料と評価されている。

2007 年国宝に指定され、北海道函館市・函館市縄文文化交流センターに保管されている（北の縄文道民会議ホームページ）。

3 件目の土偶は、1997 年（平成 9 年）に青森県・風張 1 遺跡から出土した合掌土偶【写真 4】と呼ばれているもので、今から約 3,500 年前（縄文後期後半ころ）のものとされている。



写真 4

国宝土偶としては唯一の座像で、高さ 19.8cm と最も小型のものである。両腕を両膝の上に置き、正面で手を合わせて指を組んでいる姿が、まるで合掌しているようである。全身に細かな文様が施され、顔面や体の一部などには、赤色の顔料が認められたことから、使われていた当時には全身が赤く塗られていたと推測されている。

更には、両足の付け根や膝などは割れており、そこをアスファルトを使って修復していたことも判明している。この土偶は住居跡の片隅に置かれた状態で出土した、非常に数少ない例として貴重な資料となっている。

2009 年国宝に指定され、青森県八戸市・八戸市埋蔵文化財センターにおいて保管されている（八戸市ホームページ）。

4 件目の土偶は、1992 年（平成 4 年）に山形県・西ノ前遺跡から出土した通称「縄文の女神」【写真 5】と呼ばれているもので、今から約 4,500 年前（縄文中期ころ）のものとされている。

高さ 45cm と大型で安定感あふれる立像で、顔面を表現せず、腕を省略し、角張った肩から W 字に乳房を張り出すなど、人の姿



写真 5

を究極まで象徴化しつつ、八頭身の様式美も兼ね備えており、その優美な姿は、造形的に素晴らしく、現代でも美術品として十分通用する、国内最大級の土偶である。

この土偶は、道路の建設ルートにかかる遺跡内から、左足、右足、腰、頭、胴体など 5 つに割れた状態で出土し、復元された。その他、同様の形態をした頭部から脚部までの破片 47 点についても、国宝附として指定を受けている。

2012 年国宝に指定され、山形県山形市・山形県立博物館において保管されている（山形県立博物館編 2013）。



写真 6

高さ 34cm の立像で、これまでに出土している「国宝土偶」とは異なり、頭部に逆三角形の面が取り付けられ、上半身には左右非対称の幾何学模様が印象され、腹部にはヘソを示す円形の突起物が見られる。両手を水平方向に広げ、下半身はビヤ樽のように太くがっちりとしている姿は、実に威風堂々としている。粘土紐を積み上げて作りだした中空土偶である。

この土偶は、遺跡のほぼ中央に位置していた墓、と考えられる穴が密集する場所で、穴

の中に横たわるように埋められた状態で出土しており、埋葬品なのか、この土偶だけが単独で埋められたものなのか、はっきりとはしていない。

2014年国宝に指定され、長野県茅野市・尖石縄文考古館において「縄文のビーナス」とともに、保管されている。（『茅野市尖石縄文考古館』ホームページ）

以上の5点が現時点で国宝に指定されている土偶である。それぞれ大変に個性的であり刮目に価することはもとより、周囲の風景、鳥獣の鳴き声、体感気温の違いなどから季節の移ろいを感じ、衣食住その全てを、自給自足する生活を営みながら、様々な思いを込めて「土偶」を作りだし、生き抜いた古の人々の、心の豊かさが伝わってくる。さすが国宝と首肯できるものばかりであった。

3. 結び

以上、魅せられし「土偶」についての報告は、ひとまず区切りをつけたい。

これまでの私の生活の中では気にかけることもなかった、何気ない日常の風景や、自然が教えてくれることに素直な姿勢で目を向けて耳を澄ませることができた、このうえない一年であった。私は今後も、ここ地底の森ミュージアムのボランティアを続けながら、マイペースで、魅せられし「土偶」についての学びを続けていきたいと思っている。

活動報告の終わりに、今後も開発に伴う発掘が行われるであろう、広さ90haにも及ぶ、ここ富沢遺跡の一角から、新たなる「土偶」等の遺物が発掘され、地底の森ミュージアムに展示され、未来の人々が、それを眺めながら、古の人々の暮らしぶりに想いを馳せ、悠久の歴史の中で培われてきた、この地のことを語り明かせる、とこしえに安寧な国を願い結びとしたい。

出典

写真2～6：小林達雄監修（2013）『別冊太陽 縄文の力』平凡社

引用・参考文献

小野美代子（1984）『土偶の知識』東京美術

平凡社編（2000）『マイペディア 2000 for Win』

三上徹也（2013）『縄文土偶ガイド』新泉社

MIHO MUSEUM 編（2012）『土偶・コスモス』羽鳥書店

山形県立博物館編（2013）『国宝 縄文の女神』山形県立博物館総合案内別冊

Simon Kaner 編（2009）『THE POWER OF DOGU』THE BRITISH MUSEUM PRESS

ホームページ

北の縄文道民会議（閲覧日 2017.2.15）

<http://www.jomon-do.org/chukudogu>

茅野市尖石縄文考古館（閲覧日 2017.2.15）

<http://city.chino.lg.www/contents/1446170903338/index.html>

<http://city.chino.lg.www/contents/1446544820161/index.html>

八戸市（閲覧日 2017.2.15）

<http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/12,21230,43,153.html>

1. はじめに

私の小学生時代、学校にお弁当を持ってこられない友達も多く、そうした側で自分が弁当を食べるというつらい体験があった。それ以来私は、食の大切さを身にしみて感じ、食へのこだわりを持ってきた。戦後、家計に占めていた食費の比率は60～70%であったが、現在は、かなり低くなっている。人間にとって生きるためにも食は重要であり、食の大切さは永遠に変わることはない。

旧石器時代、人々は食を求めて動き回った。縄文時代に入り、食料を確保しやすいところに定住を始めたが、食料を確保するためには、並々ならぬ努力が必要であったと思う。その食料を大事にする努力は、現代にも繋がり、教訓があると考えてきた。

テーマを食に求め、食料の確保と食べるための工夫をして、懸命に『活きた』縄文時代の人々の取り組みに焦点を当てて、主に東日本を中心に考察していきたい。

2. 成果

①縄文時代の食べ物

縄文時代の食を考える場合、当時の人々の生活基盤となった食料残滓の研究が不可欠であるが、日本は酸性土壌のため、当時の人々の食料残滓である動物や植物が遺跡から出土する機会は非常に限られている。限られた条件ではあるものの、食料残滓の分析から人間の生業活動を復元することが可能なのは、貝塚、石灰岩洞窟、泥炭地などの特定の条件が揃った遺跡だけである。なかでも、縄文時代の貝塚はその分布の広さや密度、内容物の豊かさから様々な情報が得られている。出土した動植物から狩猟・採集の季節を明らかにで

きるようになり、年間を通じた生活の実態を考える手がかりとなっている。

縄文時代前期の福井県鳥浜貝塚では、低湿地と貝塚の2つの条件が重なり、食料残滓が豊富に出土している。堅果類と魚類を中心とした食料獲得活動が年間を通じて行われていたことが明らかになっている。また、晩期の東松島市の里浜貝塚では、貝の成長曲線などを利用して採取した時期が推測された。その結果、一年を通しての定住が証明されたという（泉 1996）。

日本各地での調査成果をもとに、多くの種類の食料を手にしたことがわかっている。イノシシやシカを中心に様々な哺乳類、鳥類を捕まえて食べていた。ムササビ、ネズミなど小動物の骨も含まれ、これらも食べたと想定されている。イワシ、アイナメをはじめとした海、川、湖、沼からとれるあらゆる魚やアサリ、カキなどの貝も食べた。

植物性の食料は、各種のドングリをはじめ、クリ、トチ、クルミなどの炭化物や殻が出土している。その他、ノブドウ、木イチゴなどの果実、ワラビ・ゼンマイ・コゴミ・タラなどの山菜、クズ、ヤマノイモ、ユリ根などの根茎類も食べた（小畑 2010）。キノコ形の土製品も出土しており、キノコも食用にしたと想定されている（鈴木 1993）。

骨に含まれている炭素や窒素の同位体を使った分析により、縄文人が、何をどのくらい食べたかを明らかにできるようになってきた。約4000年前の縄文後期、貝塚から見つかった人骨（福島県三貫地貝塚、宮城県里浜貝塚、千葉県古作貝塚）は、木の実への依存が大きかったという。古作貝塚人のタンパク質の依存率を見ると、植物 30.8%、陸上

草食動物 29.7%、魚類 28.7%、貝類 10.8%とバランスよく食べている。肉食忌避の考えが想定される江戸時代の人骨は、栄養不足を示す痕跡が多く見つかっており、縄文人の方がより栄養をとっていたという考え方もできるという（佐原 1997）。

また、縄文時代の北海道沿岸部の人々は、アザラシ、オットセイなどの海獣、海産物への依存が大きいことがわかっている。一方、本州以南の人々は植物を食の中心としながら、沿岸部では海の生き物を食べ、山あいの人々は、動物を食べるなど住まう場所で特徴があった。四季の移り変わりを的確に把握して、その地に応じた食物を入手していったのである。木の実を中心に、今日の私達が食べている多くの食材を組み合わせ、北海道沿岸を除いて植物食を中心とした食生活が成り立っていたと見られる。多様な環境の中にあっても、基本的な食には共通性が見て取れるのである。

②食料の確保

縄文時代が旧石器時代と比べて大きく異なる点として、人々がムラを作ったことがあげられる。縄文時代になると森林からは、木の実や動物を得ることができ、近くの水系で魚介類が捕れるという絶好の場所にムラをつくっていった。

一つのムラのテリトリーは、直径9キロメートル、面積は7000ヘクタールくらいといわれている（鈴木 2002）。非常に広い範囲を一つのムラが確保していた。それだけの広さがないとムラは成り立たず、そのテリトリーの大部分は、森林であった。その森林で、秋になると、ドングリ・クリ・クルミ・トチなどの実を大量に採集できた。それを保存し、食料とした。その証拠は、多くの遺跡で貯蔵穴に入った木の実の殻などがみつかることである。また、ヤマノイモなどの芋類、春にはワラビやゼンマイ、コゴミやタ

ラの芽などの山菜も入手できた。

ムラの近くは、クリ・トチ・クルミ・コナラなどの木を意識的に残したり、育てることで雑木林のようになっていたのかも知れない。木の実を取る、燃料材を取る、生活用具などの材料を取るなどもあった。林産物を取ることは重要であり、落ち葉かき、山菜取りなどのための雑木林、里山の原型は縄文時代の集落の形成に求めることができるという（鈴木 2002）。

堅果類は、高カロリーという他の食物にない長所を持っている。しかも採集が容易で、一度に大量に手に入れることができ保存がきいたが、灰汁が強いという短所もあった。クリは、花粉分析などにより、管理栽培されていたことが考えられている。集落の周辺に数種類の木を生育させ、結実期間の差によって採取期間を調整し、作不作を担保して、飢饉対策でもあったという研究がある（泉 1996）。

縄文時代の人々は、動物や魚介類を捕まえたり、ドングリを集めたりしていた狩猟採集民だと思われてきた。近年、研究の進展によってアサ、エゴマ、ヒョウタンなどの栽培が行われていたことや、中頃には大豆や小豆の栽培も始まったことが考えられるようになってきた。三内丸山遺跡からは、ヒョウタン、マメ、ゴボウ、エゴマ、アサ、ヒエなどが発見されている。集落の周りに生えていた植物を巧みに育て、クリ林、ウルシ林などのように植物を栽培するなど資源の管理も行っていた。

③食に関する技術—調理、貯蔵—

最終氷期最寒冷期以降、1万数千年前頃にかけて、気温は上下動を繰り返しながら少しずつ暖かくなってきた。草原で暮らすナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物がいなくなり、森を作る樹木にも変化が現れてきた。環境の変化に応じて、新たな食料を得る工夫、



写真① 地底の森ミュージアムイベントにおいて、複製土器を用いた煮炊き調理のようす

食べるための努力をしなければならなかった。煮炊きできる土器の発明は、食料対象物を拡大させることとなり、日常生活に欠かせない道具として広がっていき、生活を変化させていくことにつながってきた。日本列島で見ついている最古の土器は約1万6500年前のものである（青森県外ヶ浜町大平山元Ⅰ遺跡）。

調理とは、食物全体の中から、食べられない部分を取り除き、そのままでは食べられない部分を加工したり、食べやすくすることである。その第一は、煮たり焼いたりすることである。土器で煮炊きすることによって、灰汁のあるものも灰汁を抜くことができるようになり、それまで食べられなかった高カロリーのドングリ、トチノミ類や植物の根なども食べられるようになった。貝や魚を煮た汁も飲めるようになり、高齢者や幼児などにとっては、食べ物の持つ栄養を摂取しやすくなった。粘土を使用することで、好みの形に作ることもできた。

また、木の実や根菜類をすりつぶして粉に加工するためとみられる磨石や石皿などの石器も出土している。それらを利用して作ったと思われるクッキー状やパン状の炭化物が出ており、澱粉の利用を示すものと考えられて



写真② 縄文食の復元：滋賀県栗津第三貝塚出土資料をもとに再現したもの（泉編 1996 より）

いる（鈴木 1993）。

縄文人の食物の保存、加工に関する技術は、食料の不足しがちな季節や天災などによる食料資源の変動にも対応できたであろう。各地の集落遺跡から「土坑」が見つまっている。断面がフラスコ形をした土坑の中から、クリやドングリなどが発見されることから、木の実を貯蔵するための穴と考えられている。岡山県前池遺跡で発見されたドングリとトチを入れた貯蔵穴の上部は、樹皮・網代などで覆われており、入念な処置が施されていた。今日の芋穴や野菜室などのような簡単な貯蔵施設も使われたと考えられている。動物質の食料は、干物、燻製などが考えられるが直接的な証拠は発見できていない（鈴木 1993）。

④食料確保を通しての交易、交流、発展

縄文時代に、灰汁抜きなどの利用技術の開発によって食料対象物を次々と増加させることができただろう。早期になると、地面を掘り込んだ竪穴住居が増えていき、定着の度合いを強めるとともにムラの規模も大きくなっ

ていった。定住していくなかで貯蔵による余剰がムラに存在するようになり、食料が交換され、物資が広域に交易される基盤となっただろう（泉 1996）。

縄文時代後期に、生産が確認されている塩は、次第に自己消費量を上まわっていったと想定される。塩や塩を用いた加工品は、交換の対象品となっていた。縄文時代晩期には、海岸から数十km離れた山形県の内陸部から製塩土器が見つかり、太平洋沿岸の遺跡から塩や塩を用いた加工品の交易が広範囲に行われていた証拠と考えられている（福島県立博物館編 2001）。

塩そのものを運ぶよりも、むき身の貝や干した魚など保存できるように加工した海産物が山間部へ持ち込まれることはより早い時期から、行われていたようである。東京都北区の中里貝塚は、長さ1キロメートル、幅100メートル、貝層の厚さ4.5メートルという、縄文中期の大規模な貝塚であり、その規模の大きさから内陸部のムラへのむき身の貝を供給した貝塚だったと考えられている。三内丸山遺跡では、ブリとサバの背骨だけが大量に見つかり、海岸部のムラで加工され運び込まれたことが推定されている（小畑 2010）。

三内丸山遺跡では、集落の大きさに比べて土器の数があまりにも多いのは、他の地域に送るためであり、土器の生産地でもあったといわれている。作られた土器や土偶は周辺のムラに供給されていたと考えられる（泉 1996）。

⑤まとめ

食料が多種多様に亘っており、少数種に限定されないところに縄文経済の進歩があった。食料化のための工夫がされていたのである。

多くの植物質食料は、限られた季節にしか入手できないが、越冬、天災に備えて保存、

貯蔵も行われた。保存した材料を土器で煮炊きすることによって、食料対象物が拡大された。さらに製塩専用の土器が開発され、土器製塩が盛んに行われるようになった。土器製塩は、高コストな生業と考えられ、その維持のためには、一定の集団規模を前提とした労働力の投下が必要であった。松島湾周辺地域は、中核となる貝塚が鼎立し、それぞれが拠点集落の周囲に複数の製塩拠点を展開させている（高橋 2014）。

3. おわりに

縄文人は、季節ごとにどのような食料が手に入るか、自らの命さえ懸けて試食し、一つ一つ食べられるものを学んで、確認してきたのだろう。多くのものを食材とし、その利用法を工夫することで、必死に命をつないできた。

現代における私達も、いつ気候の変化などにより食料危機に見まわれなくても限らない。縄文時代の苦労に思いをはせ、その多様な食材利用を学びながら食の大切さをかみしめ、食料の自給率向上などに努力していかなければならない。

*参考文献

- 泉拓良編（1996）『歴史発掘②縄文土器登場』講談社
- 小畑広巳他（2010）『日本の歴史①一国のなりたち』小学館
- 加藤晋平他（1994）『縄文文化の研究2』雄山閣出版
- 佐原真（1997）『食の考古学』東京大学出版会
- 鈴木公雄（1993）『縄文人の生活と文化』講談社
- 鈴木三男（2002）『日本人と木の文化』八坂書房
- 高橋満（2014）「製塩活動の展開と技術」『縄文の資源利用と社会』雄山閣
- 福島県立博物館編（2001）『食と考古学』福島県立博物館

縄文土器が語りかけてくれたコト

佐藤 則子

1. はじめに

高度に科学技術が発達し、自然をもすべてコントロールできるかのような錯覚の中で、便利で豊かな生活を享受していた日本人にとって、6年前の東日本大震災・福島第1原子力発電所事故は、想像を絶するものであった。これまでの生き方をふり返った人はたくさんいたであろう。私もその一人である。しかしながら、当時の想いは復興の言葉の影でかなり風化しているように思う。人間は自然の一部であり、自然の恩恵がなければ命をつなぐことができない。飽くなき欲望によって、一方的に自然の恵みを貪り続け、先端技術の結晶であるはずの原子力発電の事故により、目に見えない恐怖に長くさらされることになった。

今回、市民文化財研究員の活動を通して、日本人の精神のルーツを探り、これからの生き方を再考する機会としたい。

2. 活動経過

5月 三神峯遺跡表面採集、「地下鉄沿線の遺跡について」講演会聴講

7月 地底の森ミュージアム特別企画展「いにしへの石の道具」見学、第64回文化財展「発掘された仙台」見学

9月 青森県三内丸山遺跡見学、縄文の森広場ミニ土偶展見学

10月 見学会「杜の都の原風景」参加、岩手県盛岡市遺跡の学び館「盛岡の縄文時代中期の装飾」見学、縄文土器・石器づくり体験実習

11月 視察研修「山王団遺跡」参加、六反田遺跡発掘現場見学、東北学院大学博物館見学

12月 土器野焼き、石蒸し料理体験実習、奥松島縄文村歴史資料館・七ヶ浜町歴史資料館見学

1月 東北歴史博物館「修復された被災文化財」・国立科学博物館「ラスコー展」・東京国立博物館平成考古館見学

2月 地底の森ミュージアム友の会「貝塚をめぐる」講演会聴講、「まもりつたえる富沢遺跡・山田上ノ台遺跡 これまで／これからの20年・10年」シンポジウム聴講

以上、資料館見学・講演会聴講・体験実習等を通し、併せて関連する文献を読み込む活動を行った。

3. 成果

日本人の精神のルーツという点、登呂遺跡の発掘で明らかになった水田耕作を中心とした、のどかで平和な弥生時代にあると思っていた。農耕社会に移行する前の縄文時代は狩猟・漁撈・採集の段階にとどまり、野蛮で遅れていた世界であり、2つの間には断絶があると思い込んでいた。しかし、遺跡発掘も進み、諸科学分野も進展し、それらの歴史観が塗りかえられているようだ。その時々々の社会背景によって、人間は都合の良い見方をしてしまうのだろうか。歴史観は変化するものとしても、日本人の精神の底流にある基本的な世界観は変わらず存在していると思われる。

今回、各地の博物館で想像を超える縄文土器との出会いがあった。それらは青森県・岩手県・宮城県から出土した深鉢である。



写真①



写真②

写真①は、盛岡市大館町遺跡出土深鉢である。この土器表面には、縄文の他、粘土紐を貼り付けた隆線文で装飾されている。高さ 92.8cm、最大径 61.5cm という巨大な土器である。

写真②は、盛岡市繫V遺跡出土深鉢である。この土器は、口縁部に不思議な形をした立体的装飾がついている。これらの土器が今回のテーマを考察するきっかけとなったものである。どちらも縄文時代中期で、大木 8b 式である。

大木式土器とは、縄文時代前期から後期はじめに、東北の南部で作られた土器である。形と文様の違いから大きく 10 段階の変遷が考えられている。大木 8a・b 式土器は装飾性の高い土器が特に多い。

考古学では、土器は煮炊き用鍋とされている。しかし実際目にしたものに関しては、その不安定な形状や認識不能な文様などから、どうしても違和感を覚えた。何か言葉にできない心を動かす力があると直感した。それらを見て感じたのは、①豊かな観察力をもたらしたであろう自然との関係はどうだったのか、②土器の文様、装飾を生み出した発想力はどこから生まれたのか、③高い技術力と製作への集中力の源は何だったのか、ということであった。鍋という機能性云々の前に、何か特別な思いを託す器であり、そこに縄文人の心性が隠されていると思われた。そのモノづくりの動機となっている自然環境との関わり方や精神世界について、いくつかのキーワードを通して近づいていこうと思う。

(1) 生態系

自然界には基本的に生態系がある。植物、動物、菌類が、生産（植物群）→消費（動物群）→分解（菌類）という役割をもっている。太陽光（生命エネルギーの根源）をエネルギーとして活用できる植物群が起点となり、動物群による生活（食う・食われる、呼吸・排泄・遺骸等）があり、その動植物を分解する菌類があるという循環が地球上の命を維持する仕組みとなっている（井口 2012）。

縄文人は、現代人のように自然を科学技術などでコントロールするという思考はない

だろう。動物、植物と共に存在し、火山噴火、地震、台風、洪水などの自然現象に畏怖し、また自然の恵みに感謝するという、ほとんど自然に依存する形で生活していたと思われる。それが生態系の一員として、生態系システムの循環の中で一万年という長い時間を生きたことにつながっていったのかもしれない。彼らの行動は自然界のリズムに沿って行われ、観察することにより生きる糧・術を獲得していったのだろう。土器づくりも土と火の化学変化に偶然気づき、発見したのかもしれない。そして日本列島の独特の地形や風土によって地域色豊かな土器が生まれていったのだと思われる。

（２）普遍的無意識・元型

心理学者ユングによって用いられた術語で、精神的疾患の有無、また時代や文化を異にする人々にも共通な神話創造を行う心の層があるとし、この心の層を普遍的な無意識と名付けた。人間は生きていくために、世界を認識し行動する。さらに行動によって認識を深めていく。この認識—行動というパターンを常に繰り返して生きているのである。そのパターンを原型と名付けた。人間も動物と同じように、遺伝的情報として、生得的に元型を持っていると考えられる（ユング 1982・1990）。

機能性は二の次で、手間と時間をかけて作ったと思われる不思議な土器を理解するには、心の問題を扱う学問、心理学、神話学、宗教学、脳科学などの視点が必要であろう。これらの土器は単なる調理器具を超えて、神話的思考に促され、自然界の全てを創造し、動かす目に見えない存在（カミのようなもの）との媒体となり、縄文の人々は食料の豊穡や命の継続を願い、切実に祈りを捧げたのだろう。

（３）シンボリズム（象徴体系）とレトリック（修辞法）

人類はシンボルを創造し、それを体系化する能力によって、自然や世界を認知してきた。心の中に生まれる観念としてのシンボル。それを現実の生活の中で具体的に表現する造形手法がレトリックである。縄文人が使ったレトリックは「誇張法」と「隠喩法」である。例）月：新月と満月を一定の周期で繰り返す月をもとにして、死から再びよみがえるもの、不死や再生と考える。

蛇：脱皮と冬眠を繰り返すことから再生のシンボル。

女性：月と同じく生理周期を持つ存在。女性（子宮）。

水：月と親和性のあるものと考えられる。水（羊水）。

これら月—水—子宮—蛇が不死・再生のシンボルとして関連づけられ神話的世界観を表現する（大島 2016）。

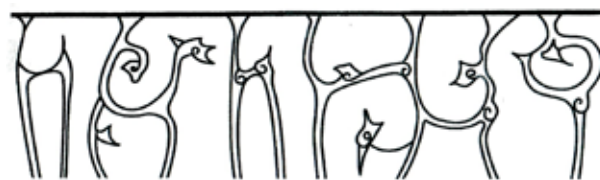


図 大形深鉢 文様展開図

盛岡市大館町遺跡から見つかった、縄文時代中期の大形深鉢には上図のような粘土紐による隆線文が施されている。この図は、土器を多方向から撮影して1枚の写真に合成したものを基にしている。

植物のツタのような動物のトリのような、何を表しているのかよくわからない文様がある。縄文人はリアルな表現に興味がなかったのか？文字をもたなかった彼らは、あえて絵文字のようにいくつかの重要なシンボルを図案化し、それらを様々に組み合わせたり、変形させたりして、表現を広げていったのかもしれない。縄文人のなかには、デザイン感覚に優れた人がいて、彼らの土器に託す思いを共通に認識できる文様に変換していたとも考

えられる。容れものであるモノに多種多様な文様、装飾を施したことに、非常に豊かな感性と精神性が感じられる。

(4) 死生観

死を悼み、遺体を埋葬することはヒトのみにみられる行動である。人類史的にみた場合、多様な埋葬行為はホモ・サピエンスにのみ見ることのできる複雑な思考の産物である。

縄文時代の人々も地域や時期で異なるが、多様で複雑な葬法を行っていたことが確認されている。その一例として、土器の中に乳幼児の遺体を埋葬する土器棺墓がある。土器を女性の身体（母胎）になぞらえ、この中に遺体を戻すことで、もう一度生まれる、再生を祈るのである。ここに「回帰－再生－循環」の死生観が読み取れる。この死生観は、この世のものはすべてあの世とこの世を循環すると考える、アイヌの「もの送り」の思想ともリンクするものである（山田 2015）。

縄文人の生業の中でも狩猟は、常に危険をはらんでいる。生は同時に死であり、死は同時に生であるという、生死が共存する世界である。彼らは死を恐れるが、それ以上によみがえり、再生を強く願うのである。死をタブー視し、遠ざけようとする現代人に、再生の神話は理解しがたい。

埋設土器の中に子ども以外に、イノシシ・シカ・イヌ・木の実・黒曜石・石斧などが一緒に納められていたことを知ったとき、縄文時代の自然観の深さを知り、現代日本人にとって取り戻すべき世界観だと思われた。人間の能力を超えた、目には見えないが特別な力を持つ存在を、自然化のすべてのもの、動物、植物、自然現象、道具にまで感じて、畏怖や尊敬を抱きつつ、命の再生をひたすらに祈った縄文の人々。その世界観を非合理的・呪術的と切り捨てず、自然をどんどん開発して前に進もうとする現代日本人の心性、思考にブレーキをかけられたらと思う。遺物を通

しての世界観の探求は困難で、簡単に結論づけられないが、日本列島に1万年間続いた縄文時代。その人々の自然観は「いただきます」「心を込めてつくる」などの言葉に弱弱しくも受け継がれているのかもしれない。

4. おわりに

縄文レクイエム

夜が明けきらぬ まどろみの頃
折りたたまれた記憶の層が目覚ます
それは 地熱を孕んだ大地の記憶
いのちを育む水の記憶
雷鳴とどろく炎の記憶
地球を巡る風の記憶
そして遺物包含貝層から現れた縄文の夢

土、土、土と水、水 手と手と手
土、土、土、土と水 手と手と手
手と手と手……
じゅもん じゅもん じゅもん じょうもん
手と手と手……
じゅもん じゅもん じゅもん じょうもん
風、風、風、風、 炎、炎、炎
炎、炎、炎、炎……
じゅもん じゅもん じゅもん じょうもん

身ごもるあなたとまなざしが交差し
清らかな記憶を分かちあう
それは 三十年前の忘れがたき月光の記憶
六年前の手放せない星空の記憶
(佐藤則子 2017)

上記の詩は、今回の活動の経過の中で生まれたものである。過去の遺物を単なるモノとして葬り去るのはたやすいけれど、すぐれた遺物との出会いは、様々な気づきを与えてくれる。

今後も学びを深めつつ、その楽しさを若い世代の人たちと分かち合えたらと思う。

引用・参考文献

- 阿子島香編 2015『北の原始時代』吉川弘文館
- 安斎正人編 2006『現代考古学事典』同成社
- 井口直司 2012『縄文土器ガイドブック 縄文土器の世界』新泉社
- 梅原猛編 2004『縄文人の世界—日本人の原像を求めて』角川書店
- 大島直行 2016『縄文人の世界観』国書刊行会
- 北の縄文文化を発信する会編 2013『縄文人はどこへいったか』インテリジェントリンク
- 瀬口眞司・永野仁・岡田憲一・狭川真一 2013『縄文人の祈りと願い』ナカニシヤ出版
- 小林達雄監修 2013『別冊太陽 縄文の力』平凡社
- 東北芸術工科大学編 2008『東北学 新たな縄文像を探る』柏書房
- 東北芸術工科大学編 2015『東北学 縄文の至宝』柏書房
- 藤村東男 1984『縄文土器の知識Ⅱ 中・後・晩期』東京美術
- 山田康弘 2015『つくられた縄文時代 日本文化の原像を探る』新潮社
- A. ストー（河合隼雄訳）1990『ユング』岩波書店
- C. G ユング（林道義訳）1982『元型論 無意識の構造』紀伊國屋書店
- レヴィ＝ストロース（大橋保夫訳）1996『神話と意味』みすず書房

三神峯遺跡の表面採集

中野 直子

1. はじめに

「地底の森ミュージアム」は20年前に訪れて、遠い昔の森の跡がそのまま保存されて現代の私たちも見ることが出来る不思議さが印象に残っていた。また1年前ボランティア募集の告知が目にとまり、研修後に活動を始めようとする、簡単なことではないと思ひ知ることになった。先輩ガイドさんの奥深い知識、卓越した技術など門外漢の私にとって学ぶべきことが余りある。遺跡のガイドは時代背景や地形・気候の変化等その前後の史実を知らずには語れない。

市民文化財研究員上半期の活動で一番興味深かったのが、三神峯遺跡での「表面採集」だった。遺跡の上に立ち、探せば誰でも遺物(土器片・石器片)を拾える…こんな驚きはなかった。とは言え、5月の活動日に採集したのは大半が石で、成果は5cm程の磨滅が著しい土器片1つだった。今回活動報告をまとめるに当たり、もう一度遺跡で表面採集をすることに決めた。

2. 活動経過

5月 三神峯遺跡での表面採集・地底の森ミュージアム石器班と石器作り体験

10月 富沢遺跡・六反田遺跡発掘現場見学・土偶作り体験

11月 土器・石器・アングイン作り体験・栗原市山王圀遺跡見学

12月 七ヶ浜町大木圀貝塚・東松島市里浜貝塚見学・三神峯遺跡表面採集2回

1月 国立科学博物館特別展「世界遺産ラスコー展」見学・三神峯遺跡表面採集3回

2月 野外展示氷河期の森観察・三神峯遺跡表面採集4回

3. 成果

(1) 遺跡の概要

三神峯遺跡は仙台市太白区三神峯1丁目にある。標高約70m、面積は推定7.5haで、地形としては名取川が形成した上部河岸段丘上にあり、眺望が素晴らしく、現在は桜の名所としても知られている。仙台市内にある縄文時代前期の大規模な集落跡として評価され、縄文時代中期の土器や平安時代の土師器・須恵器も出土し、西側に古墳、北側に横穴墓群、南斜面に埴輪の窯跡が発見されており、一帯は仙台市の原始・古代史において重要な意味を持つ場所だという。

発掘調査は、1967年の宮城教育大学日本史研究会、1973・1975・1994・2007・2008年に仙台市が実施している。出土した土器・石器共に種類・量が多く、小さな土偶等も発見された。

(2) 活動の成果

今回ABCの3つのエリアに分けて調査することにした。

エリアA：南側斜面付近の林・側溝周辺

1967年の調査で遺物包含層が確認された範囲を含み、台地の縁辺部に当たる。

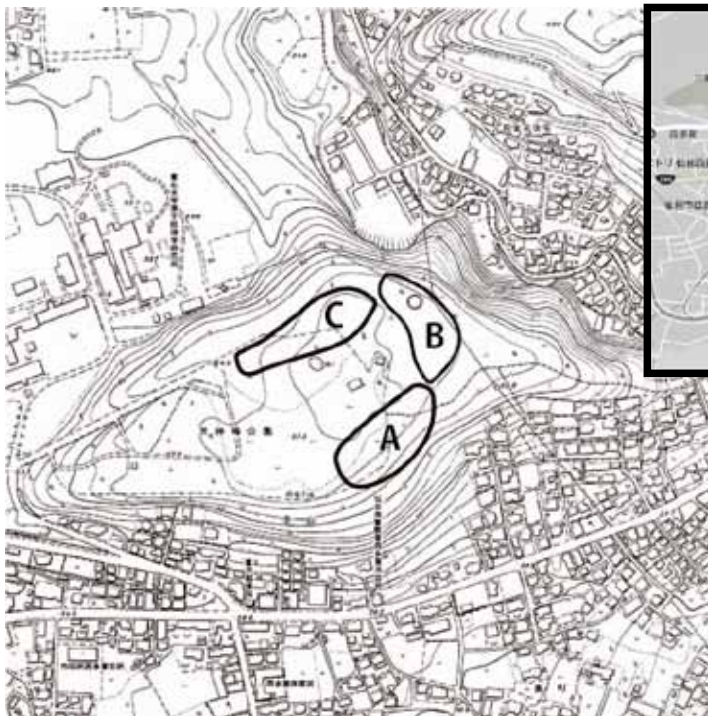
エリアB：遊具西側から石碑付近

1973・1975年の発掘調査時に竪穴住居跡が8棟、土器埋設遺構1基が発見された範囲とその周辺。

エリアC：駐車場付近から北側遊歩道南

横穴墓群発見の北斜面に近く、台地の縁辺部に当たる。

※全エリア共通してモグラ穴が非常に多い。



※岩渕・佐藤編（1980）に加筆



※地図データ ©2017Google・ZENRIN

図 三神峯遺跡とエリア図

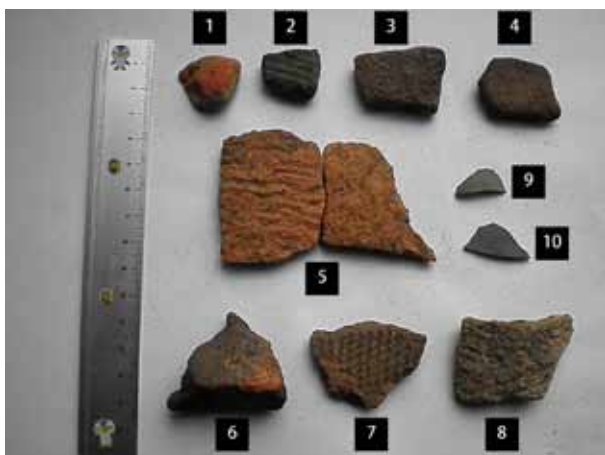


写真1 エリアAで採取した資料



写真3 エリアCで採取した資料



写真2 エリアBで採取した資料

表1 エリアAで採取した資料一覧

エリアA					
採集遺物	長×幅×厚 (単位mm)	外面	色調 内面	断面	特徴・磨滅・文様など
土器片1	25×23×11	橙色	橙色・白み褐色・黒変部	上部 橙色 下部 白褐色	磨滅著しい・無文・全体に多孔質でざらつく、石英粒がみえる
土器片2	22×22×8	暗褐色	黄褐色	褐色～暗褐色	磨滅あり・外面に縄文・内面は平らで黒変部あり
土器片3	35×24×8	褐色	白み黄褐色	黄褐色～褐色	磨滅著しい・無文・形状は平らで内面に多量の鉱物混入・全体にざらつく
土器片4	30×22×7	褐色	赤褐色	暗い黄赤色	磨滅著しい・無文・形状は平ら
土器片5	105×83×16	赤褐色	褐色	赤褐色～暗褐色	左右で外面の施文方向に違いあり・磨滅著しい・外面縄文・接合部の密着度からごく最近割れた様子・全体にざらつき鉱物の混入あり
土器片6	32×42×21	褐色・赤変部	褐色	褐色	土器底部と思われる形状・磨滅あり・外面は無文で石英混入・内面は水平方向に均され上端に黒変部、下端に赤変部・底は平らで一部欠損
土器片7	42×31×9	明褐色・赤変部	明褐色	明褐色	磨滅一部あり・外面に縄文あり・内面は平ら
土器片8	43×31×8	褐色	白みの明褐色	明褐色	磨滅著しい・形状は上辺に湾曲と下辺一部に僅かな反り返りがある
石器片9	20×9×4	青みの灰色	青みの灰色	青みの灰色	頁岩・形状は山形で外面中央が厚く内面に湾曲
石器片10	25×12×2	黒みの灰色	黒みの灰色	黒みの灰色	頁岩・形状は山形で、末端がやや外面に湾曲



写真4 エリアAで採取した資料の文様再現

写真4は、左撚りの紙紐2本を右に撚り、半分から折り曲げて、左に撚った原体を回転押圧したもの。

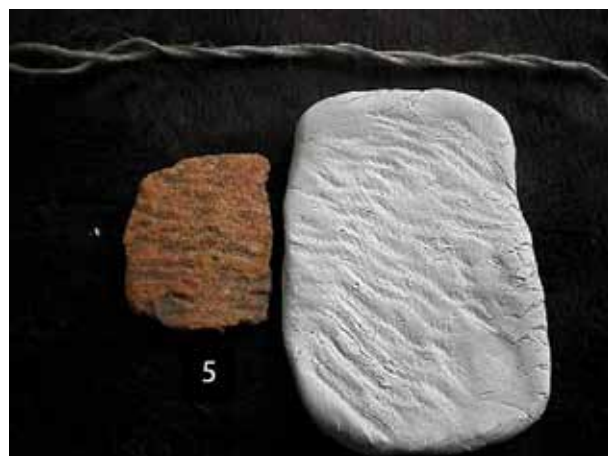


写真5 エリアAで採取した資料の文様再現

写真5は、右撚りの麻紐2本を左に撚った（撚りの甘い）原体を回転押圧したもの。

表2 エリアB・Cで採取した資料一覧

エリアB					
採集遺物	長×幅×厚 (単位mm)	外面	色調 内面	断面	特徴・磨滅・文様など
土器片11	60×38×12	赤～黄褐色	赤褐色	黒みの灰色	外面磨滅あり・5mm幅の波状沈線2本・内面は滑らか・全体に鉱物などの混入多い
土器片12	45×32×8	褐色	褐色	褐色	磨滅あり・外面に粘土紐貼付文V字形・内面は平らに均される
土器片13	48×40×6	黄褐色	暗褐色	褐色・黒変部	磨滅少ない・外面上部に竹管文と見られる円形が2個並ぶ下に波状沈線・内面は平らに均される・形状内側に湾曲
土器片14	40×40×8	褐色	白み黄褐色	褐色・白変部	磨滅あり・外面縄文あり、内面は平らに均される
土器片15	47×30×6	褐色	黄褐色	褐色	磨滅少ない・外面は1mm間隔の波状沈線・上辺に凸部、わずかに湾曲し口縁部の様な形状・内面はひび割れあるが平らに均されている
土器片16	23×19×5	黄褐色	赤褐色	赤褐色～褐色	磨滅あり・外面は3本の平行沈線、内面は均され石英粒が見られる・形状は内側にやや湾曲
土器片17	56×37×9	明褐色	黄褐色～暗褐色	褐色	外面磨滅・外面は縄文、内面は水平方向平らに均され、横1本の沈線下に黒変部・形状は平ら
土器片18	38×30×9	黄褐色	明褐色	明褐色～褐色	磨滅あり・粘土紐貼付文・形状は一部に歪みあり
土器片19	28×25×12	褐色	褐色・赤変部	赤褐色～褐色	磨滅著しい・外面は粘土紐貼付文・全体にざらつく

エリアC					
採集遺物	長×幅×厚 (単位mm)	外面	色調 内面	断面	特徴・磨滅・文様など
土器片20	45×30×11	黄褐色	黄褐色	黄褐色～褐色	磨滅少ない、5mm間隔の平行沈線3本、下部に不均一な波状沈線3本、内面は鉱物混入ありざらつく、形状は内側にやや湾曲する
土器片21	42×30×9	暗褐色	褐色	褐色	外面・断面磨滅、外面縄文あり、内面は滑らかに均されている
土器片22	28×26×7	褐色・赤変部	褐色	褐色	外面・断面磨滅、縄文あり、内面は滑らかに均され、形状はほぼ平ら
土器片23	40×26×7	黄赤み褐色	褐色・黒変部	赤褐色～黒褐色	土器底部と見られる・磨滅著しい・縁辺に赤変部あり・全体にざらつく
土器片24	44×35×8	赤褐色	黄褐色	赤褐色～黄褐色	磨滅著しい・外面は縄文が僅かに見える・形状は断面に厚みの差があり僅かに内側に湾曲する



写真6 エリアBで採取した資料の文様再現

写真6は、木の枝と竹で、沈線を施文してみた。両者とも、枝切り狭で端が尖るようにカットして用いた。施文は、工具の端部が乾燥状態と水で濡らした状態で行った。両者とも乾燥状態のほうが施文は行いやすいが、濡らした状態のほうが文様はきれいに出来るようだ。沈線は緩く波状を呈しており、上に曲げるとき（山側）でやりにくく、下に曲げる（谷側）の方が施文しやすく感じた。

実物の施文の均一さには遠く及ばず、技術の素晴らしさを実感した。

4. まとめ

4月に考古学を精一杯学ぼうと決意したが、報告内容を絞るのは難しかった。

自主活動で三神峯遺跡に行っても拾うのは石ばかりだったが、表面採集と向き合い様々な土器片を発見し、また採集後に土器片を観察した。粘土と麻紐等を購入し、縄文を再現しようと試みたが上手くいかず、縄文人の熱意と技術の継承に感心したものである。

遺跡に立って表面採集することは、毎回ワクワクする時間であった。何よりの成果はこの丘陵地が長い間人々の活動拠点となったことが理解できたことである。

厳寒のなか表面採集時に散歩中の近隣の方々に温かい声がけを頂き、今でも周辺住民の交流の場になっていることが分かった。先史時代、眼下に広がる平野部の眺めは、原生

林や湿地林で、当時の人々の心を穏やかにさせてくれたのだろうか。

現在でも竹林や木立ちが周囲に並び、地表面には堅果類、松毬、モグラ穴が非常に多く、今回の採集はモグラとの共同作業のようなものだった。地形を上手く活用し、居住区や生活道具を作っていた先史時代の人々が、自然と共生していたことを改めて実感でき、この先もこれらの貴重な遺跡が守り受け継がれていくことを切に願う。



写真7 エリアBのモグラ穴付近

参考文献

- 岩淵康治・佐藤則之編（1980）『三神峯遺跡発掘調査報告書―東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部C地点緊急発掘調査―』仙台市教育委員会
- 佐原眞（1981）「縄文施文法入門」『縄文土器大成3 後期』講談社

大野田周辺の遺跡と今

穴戸 富美子

1. はじめに

大野田地区は、仙台市南部に位置し、南を流れる名取川と、太白山に源を発する支流の笹川が北側を流れており、両河川に挟まれた沖積地である。度重なる洪水で土砂が堆積し、小高い地形となっている。

自分の住まうこの地区でみつかった、多くの遺跡の発掘調査時の姿と現在の様子を比較し、主に古墳時代から現代にいたるこの土地の変遷をみてみたい。

2. 活動経過

太白区役所や図書館等にて資料を収集・閲覧し、比較考慮するため、青森県三内丸山遺跡、東松島市奥松島縄文村歴史資料館、七ヶ浜町歴史資料館などを見学した。

また遺跡紹介パンフレットなどをもとに、大野田古墳群、王ノ壇遺跡、大野田遺跡、伊古田遺跡などの実地見学と写真撮影を行った。

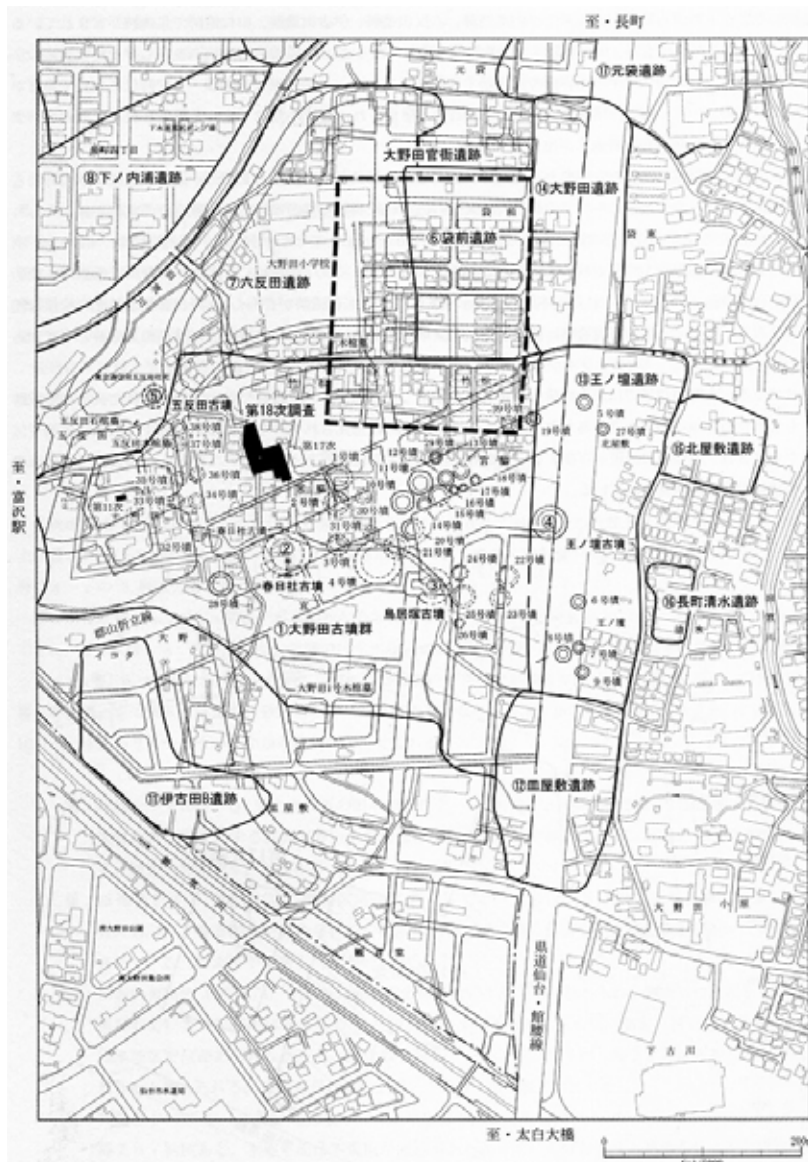


図1 大野田周辺の遺跡

紹介する主な遺跡

大野田古墳群・春日社古墳・鳥居塚古墳・王ノ壇古墳・袋前遺跡・六反田遺跡・王ノ壇遺跡・大野田遺跡

大野田古墳群

地下鉄富沢駅の東側に広がる遺跡で、前方後円墳1基と円墳43基が発見されている。5世紀後半から6世紀中頃にかけて集中的に古墳が築かれたといわれている。



写真1 発掘調査中の大野田古墳群



写真2 大野田古墳群あたりの現在

春日社古墳

大野田古墳群の中心部に位置する春日社古墳は、直径47mの規模を誇る大型の円墳である。5世紀後半から6世紀初頭に築かれたと考えられており、埋葬施設からは「革盾」が出土し、当時のヤマト政権との深いつながりが推定されている。革盾は現在、地底の森ミュージアムで公開されている。

春日社古墳は、郡山折立線の建設に先立って発掘調査されており、現在はその姿をみることはできない。古墳の上にあった春日神社は、道路建設のために西北約150mの地（大野田4丁目）に遷宮されている。



写真3 発掘調査中の春日社古墳



写真4 春日社古墳があったあたりの現在



写真5 現在の春日社神社

王ノ壇古墳

直径 23mの円墳。大野田古墳群内で唯一、現在もその姿をкаろうじて残している。写真は、発掘調査時の様子で、古墳の周囲に掘られた溝（周溝）に人が入っており、その後ろの高まりが墳丘である。さらにその後方右に、地下鉄南北線富沢駅が見える。発掘調査範囲は現在、都市計画道路・仙台館腰線になっている。道路全線の開通は平成 8 年。

道路の範囲外であった古墳の西半分は、発掘調査をまぬがれ、現在も道路の西側に墳丘が残存している。



写真 6 発掘調査中の王ノ壇古墳

現在の王ノ壇古墳

古墳の半分がきれいに整備され、公園となっている。大野田という地名のいわれとなった王ノ壇は今では古墳公園の名称やマンションの名称などで残っている。



写真 7 王ノ壇古墳の東側にあるマンション



写真 8 現在の王ノ壇古墳（北西より撮影）



写真 9・10 工事中の郡山折立線（平成 29 年 2 月）
※カメラのパノラマ機能を利用して撮影

郡山折立線 館腰線との交差部より東側の工事がいよいよ始まる（平成 29 年 2 月）

伊古田遺跡（縄文時代～平安時代）

縄文時代後期（3,500 年前）の土偶が多数出土し、大きなものは長さ 41.4cm あり、国内最大級。土偶 4 点は、仙台市指定有形文化財となっている。



写真 11 伊古田遺跡の土偶出土状況

3. 感想

この地区は水害が多く、新笹川ができるまでの居住者は大変な苦勞をしてきたとのマイナス面しか知らなかった。しかし、今回調べてみると、この辺りは大野田古墳群、王ノ壇遺跡、大野田遺跡、伊古田遺跡ほか、沢山の遺跡があることを知った。

この地は、住みやすい土地でもあったといえる。

青森県三内丸山遺跡のように残すことが出来なかったことは残念であるが、仙台市南部の交通の要であり、人々の必要とする生活の場でもある。

遺跡を博物館や公園緑地などとして残すことによって、仙台市民はもとより、日本全国の人々に、いろいろな時代の人々が、過去から現代までこの地で暮らしていたことが伝えられると思う。この地の歴史を残し伝えることは、地域を大事に思い、感謝する気持ちを次の世代に伝えることになる。

まだまだこの地には多くの遺跡が埋まっていると思われる。これからの世代へ希望を託し、それぞれの文化がさらに築かれるように

と思わずにはいられない。

出典

図 1：平間亮輔・吉田浩明（2010）『大野田古墳群―第 18 次発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 364 集 仙台市教育委員会

写真 1：渡邊誠・竹田幸司（2000）『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 243 集 仙台市教育委員会

写真 3：仙台市教育委員会編（2011）『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか』仙台市文化財調査報告書第 390 集 仙台市教育委員会

写真 6：ディスカバーたいはく編集委員編（2003）『太白区の自然と遺跡』太白区まちづくり推進協議会

写真 11：渡部紀（1995）『伊古田遺跡』仙台市文化財調査報告書第 193 集 仙台市教育委員会

市民文化財研究員活動報告書 2 1

発行日 平成 2 9 (2 0 1 7) 年 3 月 31 日

発 行 仙台市教育委員会

編 集 公益財団法人 仙台市市民文化事業団

仙台市富沢遺跡保存館 (地底の森ミュージアム)

〒 982-0012 仙台市太白区長町南 4-3-1

TEL 022-246-9153